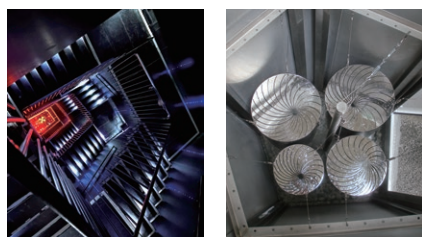


第16回aacaサロン サウンドスケープ・デザイン —風景に耳を開く—

会員増強委員会

キョロロのTing-King-Ping 音の泉 (松之山自然科学館/新潟県)

2024年のaaca建物視察会(*)は新潟方面でしたが、一番目に訪れたのは越後松之山「森の学校 キョロロ」でした。紅葉まっさかりの山に浮かぶ赤錆のかたまり。真っ暗な塔を登るとアクリル板の開口が周囲の緑の山並みを切り取って自然との一体性を感じるすばらしい体験だったのですが、この塔にはもうひとつ大地と空をむすぶものがありました。それが庄野さんによるサウンドスケープの作品です。塔の階段を登る時には暗闇の恐怖感もあったが自然と声が出てしまうことで気がつかないこともあるのですが、螺旋階段中央の掘りこまれたところに水が滴って音をたてているのです。静かに耳を澄ますと水滴が奏でる音が塔をのぼって空に向かって響いていました。敷地内の湧水を引き入れ、その水滴が独自に製作した発音フィンにあたる一期一会の音の演奏が聞こえていました。



上:キョロロ外観。左:螺旋階段の上から見下ろした塔中の「音の泉」。右:発音フィン。様々な大きさ・厚さで、その時々多彩な音を奏でる

第16回aacaサロンは、当協会会員で第10回AACA賞受賞者のサウンドスケープ・デザイナー庄野泰子さんにお話を伺

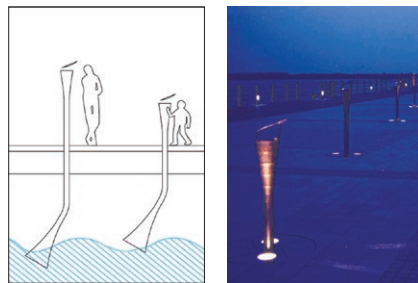
いました。その場所でしか体験できない音をできるだけ会場で参加した人が実感できるように、作品ごとに動画を準備いただきました。また音が出る仕組みを理解できるように図面だけではなく作品の制作過程の動画も用意していただき、聴覚も刺激するユニークなサロンになりました。

潜在する音の海 Umi-Tsukushi、 Wave Wave Wave

(小名浜港第2埠頭/福島県)

サウンドスケープ・デザインが水辺で本格的に取り組まれた世界初の事例で、波の音が巨大な聴診器で伝わってきます。暗くなると波の音に呼応してホーンが明滅し、新しい自然の感じ方に気づくことができます。その先には、海の上に寝転んで波の音を体感できる網状の巨大なベンチ「Wave Wave Wave」が設置されています。

一連の作品を現地審査した当時のAACA賞選考委員は「無理に装置で音を造成し、人間に押しつけるのではなく、一寸気の付かない音をそのまま人に伝えようとする作家の姿勢は共感を呼ぶものであった。だから風や波の無い時は音は聞こえてこない。」と評しています。



夜は波音に呼応して明滅するUmi-Tsukushi

coMIMInication

(茅野市民館・茅野市美術館/長野県)

大きな糸電話とも言えそうな伝声管に子どもたちのおしゃべりや笑い声が伝わる。音のワークショップも開かれて地域の音への関心をもつ機会にもなっているそうです。

開催日:2025年8月6日

話し手:サウンドスケープ・デザイナー 庄野泰子さん

モデレーター:NTTファシリティーズ 石原智也

会場:小松ウォール工業

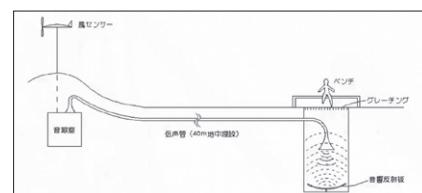
101 TOKYO SHOWROOM (東京・神田)



中庭をはさんで離れた空間を繋ぐ伝声管。右は音で遊ぶ子どもたち

風のベンチ(風の丘葬祭場/大分県)

煙を出せない現代の葬祭場で、煙に代わり風の音が地中から空に向かって立ちのぼるレクイエムとしてデザインされています。建物を設計した横文彦さんは、近くに住むお年寄りが風の丘葬祭場について「わたしはここで最期を迎えたい」と言っていたことに感銘を受けたそうですが、庄野さんがデザインされた風の音がきくと訪れた人にささやくのではと想像しました。庄野さんはサロンの冒頭で、M.シェーファーが『世界の調律』でヴァンクーバーのサウンドマーク(標識音)について記述していることを説明されていましたが、まさにここでは風の音が人生に響くサウンドマークになっているということを感じ、ぜひ実際に体験してみたいと思いました。



風のベンチと発音システム。右上は風の音を伝えるベンチ下の地中ホーン

*会報100号(2025年1月発行)にて紹介(P14-15)

<https://www.aacajp.com/record/newsletter/pdf/No100.pdf>

(副委員長 石原智也)